

◎今週の御言葉「毒麦のたとえ」(マタイの福音書13章24節～30節, 36節～40節) 「主人は言った。

『いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい』(13:39, 40) 仲森文穂

○イエス様による天国のたとえ話です。話にある毒麦は、小麦そっくりで苦味がある雑草です。これを他人の畑に蒔いていく人がいたようです。被害は大きく放置できません。しもべたちが「抜き集めましょう」と勢い込んだのは当然です。人間はいつもそうやって来ました。邪魔者を容赦なく排除することによって自分の栄光を表して来たのです。ところが、主人は「収穫まで両方とも育つままにしておきなさい」と言って、待つことを求めました。36節以下によると、麦と毒麦は、「御国の子」と「悪い者の子」を指すようです。というところは、「抜き集めましょうか」という言葉は、人が人を審くことに勢い込んでいるのです。しかし誰が自分を良い麦とし、他人を毒麦だと決めつけ、抜き集める資格があるのでしょうか。一体誰が、自分は毒麦ではないと言い切ることが出来るのでしょうか。イエス様は主人の立場に立ち、「両方とも育つままにしておきなさい」と仰り、正義を唱えて他の人々をさばく危険を戒めておられます。

○しかし両方とも育つままにしておく、その寛大さはどこから来るのでしょうか。この問いに答えるためには終末論的な信仰が必要で、人間が営んできた歴史は、沢山の痛みや矛盾を抱えこみ、死、老、病、苦などの疑問や問題があります。しかし、それすらも神様のご計画のうちであり、どんな困難があっても、最後は神様による裁きによって、私たちに真の勝利がもたらされるといえるのが終末論です。つまり、そういう人生の終わりから見れば、今の苦しみにもなお希望があり、その故に私は今日という1日を大切に生きよう、どんな苦しみにも耐えていこう、そのように決断していく信仰を、終末論的信仰と言います。私たちは清濁合わせ持った人間で、きれいなものばかりがある訳ではありません。だからでしょうか、毒麦とは極力縁を切ってしまいたいと願い易い。しかしイエス様は共に育つこと、忍耐して待つことを求めて、教会と信仰者を鍛えていこうとされます。では忍耐して待つ、私たちのその力はどこから来るのでしょうか。他ならない自分も待たれている。神様から多くのことを忍耐され、許されて今日あるを得ている。そういう自分を知り、神様の赦しの恵みを忘れないことから、その力は来るのであって、自分の決心などではないのです。私たちお互いのがこの信仰に立つとき、私たちは少々のことなどゆるし合って、生きることが出来るのではないのでしょうか。